

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 前田泰紀 (Maeda Taiki)
所属 (School) 生命環境科学域 理学類
学年 (Grade) 2 回生

留学先 (Name of overseas institution)
マラヤ大学 (マレーシア)

留学期間 (study abroad period)
2019/8/18~2019/9/8

記入日 (Date)
2019/9/15

留学レポート Study Abroad Report

夏休みの前半三週間、マラヤ大学のサマーエンリッチメントプログラムに参加した。本プログラムでは、毎日充実した活動ができた。本レポートではいくつかの項目に分けて、本プログラムでの経験を述べていく。

・寮生活

本プログラムではホームステイの一泊を除いて、三週間の寮生活だった。寮では、現地のバディに加えて他大学の日本人二人、自分を含めて計四人がルームシェアをする形になっていた。寮の中にはユニットバス、冷蔵庫、電子レンジがそろった2LDKの部屋だった。プライベートスペースとしては、自分のベットと十分な大きさのクローゼットがあり服などはすべてトランクから出しておいておくことができた。コインランドリーは寮の敷地内に設置されており洗濯ものは少なく済んだ。三週間の生活を送るうえで寮の部屋について不便を感じたことはなかった。



また、寮の周りには表が中国系の高級住宅街、裏側には大きな幹線道路が通っており。移動にも便利で治安もよい場所に位置していた。特に裏の幹

線道路を渡ったところには大きなショッピングモールがあり、寮生活を送るうえでの生活必需品はここでそろえることができた。ほかにも、多くのレストランも入っているの、夕食にこのショッピングモールを利用することも多かった。現地のローカルなレストランに比べるとやや割高な印象を受けるが、衛生面やアクセスのしやすさなどを考えれば大変便利な施設が寮のすぐ近くにあったことで快適な生活を送れた。

週一回、寮裏側の道路ではナイトマーケットが開かれていた。衣料品やご飯がその他のスーパーなどで買うよりもかなり安く買える。ナイトマーケットが開かれていた日は晩御飯を屋台で買い寮のダイニングで食べていた。本場の味が格安で楽しめたので良い経験になったと思う。



・平日の一日

この章では本プログラムの大部分を占める授業日、つまり平日の動きを述べていく。基本的に平日のタイムスケジュールは授業内容の差はあるものの、だいたいの動きは毎日同じであった。



まず、起床はだいたい七時であった。ただ、八時のバスに間に合えばよいので人によってはぎりぎりまで寝ている場合も見られた。特に印象的だったのは現地バディのほとんどが朝にシャワーを浴びていたことだ。どうやらマレーシアをはじめとする熱帯地域の人々は一日のうちに何度も水浴びする習慣があるらしい。身支度を済ませバスに乗り込みマラヤ大学に到着するとまず朝ごはんである。基本的に現地の料理が出てくる。本格的なマレーシア料理ほど辛さは抑えられている。どうしても辛い場合はその料理だけを除いて皿に盛り付ければよい。

朝食が終わった後には別棟の教室に移動して、二時間一コマの授業を二コマ受ける。この授業は writing, reading, speaking, grammar の四科目を毎日日替わりで受講する形式である。座学形式になる授業はほとんどなく多くがアクティブに英語を学ぶ授業形式がとられている。受講生は初日に受けたブレイズメントテストの結果をもとに三クラスに分割されてそれぞれのクラスで授業を受ける。このため他大学との交流が生まれる。様々な地域の大学生との交流は非常に楽しかった。

午前の授業が終われば朝食と同じ形式で昼食をとる。食事の際の席は固定ではないので他大学の日本人大学生や現地バディとテーブルを囲んで楽しく会話しながら食事することができた。このように現地バディとの交流の機会は一日の活動中で豊富にある。現地バディからは積極的に話しかけてきてくれるが、自分からどれだけ交流の機会をつかめるかで本プログラムの満足度は大きく変わるように思われる。



昼食後はマレーシア文化の授業になる。授業科目はマレーシア伝統音楽、マレーシア伝統舞踊、ドラマの三つが主な授業となる。その他には単発の授業でマレーシアの伝統料理教室や、マレーシアの伝統絵画の授業などがあった。音楽と舞踊の授業はプログラムの最後の式典で発表をすることになる。役割によってはかなり難しいものもあるがどれもやりがいのあるものだった。またドラマはプログラム後半の学校訪問で生徒の前で発表することになる。役者とダン



サーに分かれて練習をした。寮の敷地内のバスケットコートやサッカーコートで夜間にみんなで集まり個人練習をすることもあり、他大学を含めての文化祭の様相だった。

午後の授業が終わった後には食堂でアフタヌーンティーをとる。これはマレーシアの習慣であるようで間食のおやつとコーヒー、紅茶をとる。これが済めば、バスに乗り寮への帰宅となる。寮に着くのは五時頃でそれからは、各自の自由時間となる。夕食の時間にはまだ早いのでルームメイトや授業で仲良くなった人たちと遊びに行ったり、部屋で談笑をしていた。出かける際には、寮の近くであれば一人でも行動ができるが、寮から遠い場所だと現地バディに頼んで同行してもらうことが多くなる。マレーシアでの移動は grab を使った乗合タクシーがほとんどである。現地バディに頼めば配車をしてくれる。自分でもできるが、その場合には電話回線が必要になるので現地で使用可能な Sim カードを携帯していくことべきであった。





現地バディは基本的にマレーシア語と英語に加えて自身のバックグラウンドにかかわる言語を得意不得意はあれど話すことができる。様々な現地バディと出かけることでマレーシアのよりコアな料理を味わうことができる。現地バディと一緒にいくのもよいがまたには、仲の良い日本人同士だけで食事に出かけることもよい経験になった。Grab の配車から店での注文までそれまでの間に現地の人と多くのコミュニケーションをとる必要がある。授業で習ったことを実際に自分たちで使ってみることで、習ったことを身に着けることができるし、不便に思ったりうまいかなかったことは、その後の英語学習の強いモチベーションになった。

・全体を振り返って

本プログラム全体を通して自身の英語学習に対する意欲は留学以前に比べて格段に向上した。正直に述べると、この三週間で英語運用能力の飛躍的な向上があったとは言い難い。しかし、実際にコミュニケーションとしての英語を使わざるを得ない状況に三週間身を置いたことで、普段大学で学ぶアカデミックな英語とは性格の異なる、意思疎通を目的とした英語の重要性に気づくことができたし、今後それを学び続ける意欲を持つことができた。具体的に述べると、文法や語彙の正確さなどの万人の共通の理解を目指すアカデミックな英語とは別に、一対一または一対少数の状況におけるコミュニケーションを目指す英語の重要性を再確認できた。ここでは文法の正確性よりも話者の意思が相手に伝わるということが最重要である。もちろんこれは、今までに学習してきた文法や語彙に裏付けられるものであるが、それらを多少犠牲にしてでも会話のテンポでコミュニケーションをとる必要性を実際に現地で生活を送るうえで身に染みて実感することができた。



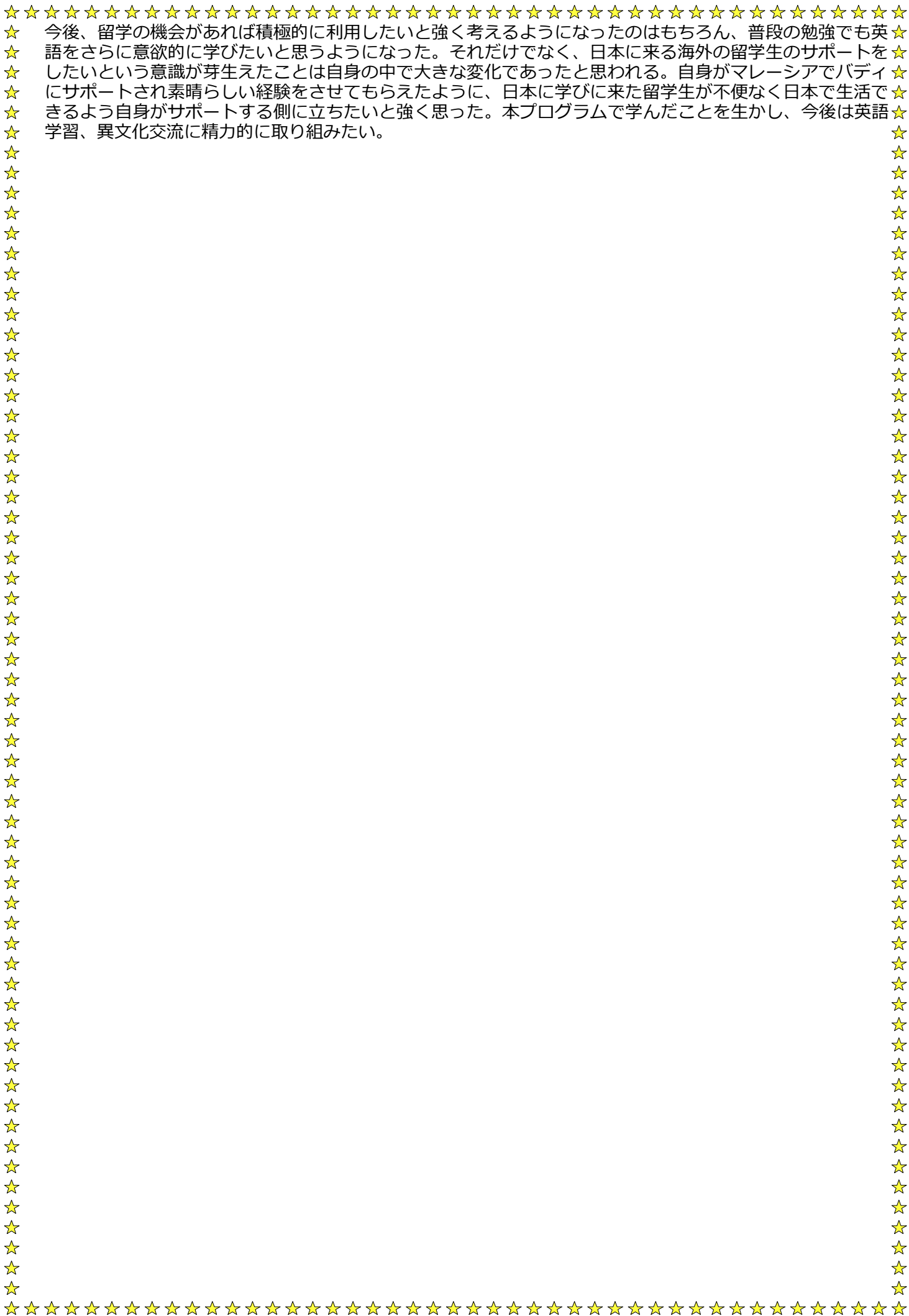
また、留学としての三週間は短期ではあるが、日本以外の国で生活を送るうえでの三週間は自身にとって代わるもののない貴重な経験であった。特に現地のバディを含めたそれまで面識のない複数とのルームシェアは自身にとって初めての経験であった。はじめは戸惑うことも多々あったが、次第に距離の取り方を学び最終日には最高の仲間と思えるまでの深い付き合いができた。このように、はじめはそれまでの自身の習慣との違いに戸惑いストレスを感じる場面は多くあった。例えば、料理や、衛生面への意識、時間順守の意識の違いなどだ。数日の滞在であれば堪えることもできる

だろうが、生活を送るうえでは我慢だけでは精神衛生上よくないのは明らかだ。カルチャーショックを感じた時点で現地のバディになぜそのような習慣があるのかを聞き、理解して受け入れることでストレスは解消される。この手順を踏むことで、本質的な多文化理解が可能になると感じた。

本プログラムで身に着けたことを端的に述べれば、英語学習のモチベーションの強化と異国で生活したことの自信である。

夕食の際には、基本的に外食に出かけることになる。プログラムが始まってすぐにはルームメイト単位で夕食に出かけることが多い。プログラムが進み、他大学の学生や自分以外の現地バディと仲良くなってくると様々なパーティーで出かけることが多くなってくる。マレーシアは多民族国家であり、現地バディもしたがって様々な民族、宗教の人たちが集まっている。異なる現地バディと夕食に出かけることでいろいろな場所に連れて行ってもらうことができた。例えば、自分の現地バディはイスラム教であったので豚肉が提供されている店にはいくことができなかったが、中華系の現地バディは豚肉料理の店に連れて行ってくれた。また、地域によっては特定の言語しか伝わらない場所もある。





今後、留学の機会があれば積極的に利用したいと強く考えるようになったのはもちろん、普段の勉強でも英語をさらに意欲的に学びたいと思うようになった。それだけでなく、日本に来る海外の留学生のサポートをしたいという意識が芽生えたことは自身の中で大きな変化であったと思われる。自身がマレーシアでバディにサポートされ素晴らしい経験をさせてもらえたように、日本に学びに来た留学生が不便なく日本で生活できるよう自身がサポートする側に立ちたいと強く思った。本プログラムで学んだことを生かし、今後は英語学習、異文化交流に精力的に取り組みたい。